

グローバル化時代の今、文化多様性の価値を問う



人	類	学
研	究	所
通	信	第20号

2019

巻頭言	.....	2
特集		
人類学研究所設立70周年記念事業(宮脇千絵・ドーマン・ベンジャミン)	....	4
国際公開シンポジウム・エクスカージョン実施報告(高村美也子)	.....	8
人類学フェスティバル2019(宮脇千絵・後藤明・西江清高・吉田凱一)	.....	12
土器の三次元計測(中尾央・中川朋美)	.....	16
活動報告	.....	19
研究業績	.....	31
刊行物	.....	33
スタッフ	.....	35



## 巻頭言

渡部 森哉 (人類学研究所・所長)

通信 20 号をお届けする。南山大学人類学研究所の 2019 年度の活動報告が中心である。

2019 年度は、4 月 1 日に宮脇千絵准教授が任期なしの第一種研究所員となり、ベンジャミン・ドーマン第一種研究所員とともに研究所の活動を中心にこなしていくこととなった最初の年である。これまで任期付教員が研究所を切り盛りしてきたが、これからは長期的ビジョンに沿って研究所を運営できるようになったことをまずは喜びたいと思う。そして 2015 年 4 月から 2019 年 3 月まで第一種研究所員として研究所の活動に尽力した藤川美代子准教授は 2019 年 4 月 1 日付で人文学部人類文化学科准教授となった。今後も第二種研究所員として研究所の活動に協力していただくことが出来ることをうれしく思う。

2019 年度は大きなイベントを複数実施した。まず人類学研究所の設立 70 周年事業である。この実施のため、大学に特別な予算（個別事業費）を前年度に申請して認められた。大きなシンポジウムを 2 本企画し、宮脇第一種研究所員が中心となって取り仕切り、いずれも成功裏に終わった。登壇者、関係者の皆様にお礼を申し上げたい。

またこの 70 周年事業に併せて、2019-2021 年度の人類研の共同研究を「大きな理論と現場の理論」とした。人類学研究所の歴史と重ねるように、人類学における大きな理論を、個別のフィールドのデータ、そこで用いられる理論的枠組みと突き合わせる際にどのように適用され、修正され、消費され、あるいは齟齬を来すのか、といったことを議論することを目的とした。それは同時に、研究者個人が自分

自身の研究を振り返る作業ともなっている。各研究者がどのような理論の中で育ち、そして影響を受けたのか。あるいは、自分の師など影響を受けた人、薫陶を受けた人がどのような理論的バックグラウンドを持っていたのか。そうしたことにも考察の対象を拡張していく。

さらに国際化推進事業のメインのイベントとして、2019 年度にフィリピンで国際シンポジウムを開催した。日本国外で開催する初めてのシンポジウムであった。この国際化推進事業の予算は後藤明教授が所長であった際に申請して認められたものである。研究員の高村さんを中心に進め、大成功に終わった。その報告は 2020 年度中に論集として刊行される予定である。また併せてフィリピンで実施されたエクスカッションについては、本通信の記事を参照していただきたい。

人類学研究所の中心の雑誌である Asian Ethnology は国際的にも認知され、投稿数が増え、レベルが非常に上がってきている。編集者であるドーマン第一種研究所員、フランク・コロム先生をはじめ、関係者の皆様のおかげである。また、長らく前任の Asian Folklore Studies の編集長であったクネヒト・ペトロ先生にインタビューを行い、雑誌編集にまつわる経緯などを語っていただき、それを Podcast に編集して公開するという活動を始めた。いわば研究所に関するオーラル・ヒストリー研究と言えようが、文字化された記録では分からない貴重な証言が得られている。このように研究所の歴史を後世に伝えていくことは極めて重要である。インタビューに協力

してくださったクネヒト先生、そして巧みな聞き手である後藤明先生に感謝したい。

上記の活動のほか、各種のシンポジウム、講演会を実施した。研究所の方針としてできるだけ刊行物に繋げていくことにした。その結果、少しずつ刊行物に繋がるイベントが多くなってきている。『年報人類学研究』、『人類学研究所論集』に所収された論文の多くは、研究所で行われた講演会、シンポジウムでの発表に基づくものである。論文を Web 上で公開することで、迅速に研究成果を届けることにしている。これは Asian Ethnology のスタイルを踏襲している。

2019 年度は 2020 年 2 月頃からコロナ・ウイルスの影響が顕著になり始め、各大学が対応に追われた。人類学研究所では 2020 年 2 月 24 日に実施した公開シンポジウムが公開企画としては最後になった。同日、厚生労働省が「新型コロナウイルス感染症対策の基本方針の具体化に向けた専門家の見解」を示し、その結果、イベント等は一気に開催中止へと向かうこととなった。

3 月 14-15 日に予定していた天文学と人類学の融合に関するシンポジウムは取りやめとなった。またインドに関する講演会は、非公開で実施した。コロナは 2020 年の後半になっても収まる気配はないので、オンラインでの企画開催など、形を変えて進めていく必要がある。いずれにせよ、我々は時代の移り変わりに身を置いていることになる。この時代の観察と記録を進めるとともに、今後の研究スタイルを模索していくことになる。コロナの前に戻るといふことはあり得るのだろうか。

渡部は 2018 年度 2019 年度の 2 年間の所長の任期を終えたが、2020 年度 2021 年度の所長を引き続き拝命した。南山大学内での他の部署とのコラボレーションなど、これからやるべきことはまだまだある。人類学研究所が中部地区の人類学研究のハブとして機能するよう、研究所員と力を合わせて盛り上げていきたい。



# 人類学研究所設立 70 周年記念事業

宮脇千絵 (人類学研究所)・ドーマン・ベンジャミン (人類学研究所)

2019 年は、人類学研究所設立 70 周年という記念すべき年でした。そこで、関連するシンポジウムを 2 つ実施しました。またかつて所長を務められたクネヒト・ペトロ先生へのインタビューを実施し公開しました。

## 公開シンポジウムの実施

南山大学人類学研究所は 1949 年に設立され、2019 年で 70 周年を迎えました。これを記念した事業として、2019 年度には 2 つの公開シンポジウムを開催しました。

第 1 回公開シンポジウム「人類学と博物館—民族誌資料をどう研究するのか?」は、南山大学人類学博物館とともに企画したものです。もともと 7 月 27 日(土)に予定していましたが、台風 6 号接近のため一旦延期となり、改めて 12 月 21 日(土)に開催することができました。

シンポジウムの目的はふたつありました。ひとつは、人類学研究所のルーツを振り返ることです。南山大学が創立された 1949 年、人類学・民族学研究所とその資料陳列室が開設されました。人類学・民族学研究所は 1954 年に人類学研究所と名称を改め、資料陳列室は 1979 年に人類学研究所から独立し、人類学博物館となりました。ルーツを同じくする 2 つの施設から、その歴史を振り返ることが目的のひとつです。

もうひとつは、民族誌資料をどう研究に活かすかを考えることです。そこで、国立民族学博物館の実践(吉田憲司先生)、物質文化研究(後藤明先生)、民具研究(久保禎子先生)、考古学(黒沢浩先生)

についてご発表いただきました。

それぞれのお立場からの発表を踏まえ、総合討論では、博物館を介した人と人、人とモノの双方向性の可能性や、記憶や記録を展示の中でどのように活かしていくのか、物質文化研究やモノ研究の展望などが議論されました。当日は約 140 名の方にお集まりいただき、盛況のうちに終わることができました。

そして 12 月 7 日(日)に、人類学研究所設立 70 周年記念シンポジウム「人類研の歩みと人類学の未来」を開催しました。人類学研究所は、神言会員でアントロポス研究所(現ドイツ)の W・シュミット博士の系譜を継承すべく 1949 年に設立されたという経緯を持つことから、このシンポジウムでは人類研と神言会との関わりに焦点を当てました。研究所の根源となった W・シュミット神父の功績(山田仁史先生)、神父様でありながら研究所の所長を務められたクネヒト・ペトロ先生のご経験(クネヒト・ペトロ先生)、そして現在と未来へとつながる報告(後藤明先生)とご発表いただき、伊藤亜人先生にコメントをお願いしました。

話題は、19 世紀ドイツ語圏の人類学の影響、植民地主義や布教と人類学といった壮大な議論から、大学における研究所の研究や教育の展望にまで及びました。当日は、南山大学で人類学を学んだ卒業生やクネヒト先生のかつての教え子などを含む約 90

名の方にお越しいただきました。

70周年を記念した2つのシンポジウムを無事に終

えることができたのも、準備期間からご協力いただい

た多くの方々のおかげです。

(宮脇千絵)



シンポジウム「人類学と博物館」



シンポジウム「人類研の歩みと人類学の未来」

## クネヒト・ペトロ先生との対談 「Connect to クネヒト」の実施

70周年記念事業の活動のひとつとして、長年にわたって、人類学研究所に貢献してきたクネヒト・ペトロ先生に、映像でのインタビューを二回行い、それを公開した。

人類学研究所元所長(1996-2002)であるクネヒト先生は、神言会の神父であると同時に人類学者である。かつて人類学研究所が発刊していたジャーナルのAsian Folklore Studiesの編集長を勤めた(1980-2006)。

対談の背景として、私が、クネヒト先生の元で、2003年から2006年まで、Asian Folklore Studiesの編集員として勤めたことがある。その間、クネヒト先生から、人生の歩み方、研究のあり方、ジャーナルの歴史、ジャーナルに関する思いなどのお話を伺った。

クネヒト先生のお話は、南山大学人類学研究所にとって、とても意義のある貴重な話であったため、先生の退職後、さまざまな形で、先生の感想などとともに公開しようと考えた。その第一報として、Asian Ethnology Podcastのインタビュー(英語)を2017年11月2日に公開した。

2021年は、ジャーナルの80周年を迎える記念すべき年である。その準備も含めて今回、人類学研究所70周年記念事業の一つの活動として、クネヒト先生のお話を映像で記録することにした。インタビューの聞き手は、人類学研究所元所長の後藤明先生にお願いした。撮影は南山大学学内で行った。

第一回目の撮影日は2019年7月29日であった。インタビューでは、日本への関心、人類学者への道のりなど先生の軌跡に焦点を当てた。

内容は以下の通りです。

- スイスでの誕生から神学への道
- 高等学校時代からの日本への関心
- 文化人類学への関心
- 日本文化との接触
- 棟方志功の版画

- 神学を学びながら宗教や言語へも関心をもつ
- スイス・ライネックで教鞭をとる
- 布教から考える異文化接触、異文化理解
- 日本への想いがかなう
- 日本に来て感じたこと / 1966年
- クネヒト流の日本語勉強法
- 東大・大林太良先生との出会い
- 東大での学び: 伊藤重人先生と東北へ
- 民俗研究 / フィールドワーク研究のはじまり 伊藤重人先生
- ガイジンである自分、よそ者ではないフィールドワーカー
- 60年代における学生運動
- 花山でのフィールドワーク
- 花山でのイタコ調査
- 双子のウシ誕生の儀礼
- フィールドにおいて「語られないこと」をいかに読み取るか
- 花山の人たちと故郷スイスへ
- スイス農村の取り組みを学び、花山へ活かす

第二回目の撮影日は2019年11月18日であった。テーマはAsian Folklore Studies (AFS)に関する話であった。

- 東大で学び、その後、南山大学で講師としてのスタート / 1978年
- Asian Folklore Studies (以下: AFS)の編集長への経緯: 創始者 M. エダー氏の後継者として
- Fanny Hagin Mayer 氏
- Copy Editor: Michael Kelsey 氏のコーディネートにより本の出版に至る
- 1963年創刊 AFS / 創始者 M. エダーについて
- 宣教師 (Missionary) であった M. エダー氏
- 中国北京 輔仁 (フレン) 大学
- 1976年 南山宗教文化研究所からの発行
- M. エダー氏の考え / アジア人の研究者を推奨し発表する場を提供



クネヒト・ベトロ先生 (2006年8月11日撮影)

- Indiana University Richard Dorson 氏
- 編集長としての苦労話 / 編集長をひとりで任されたときのエピソード
- Nelly Naumann 氏
- AFS の投稿により、昇格の道が開く
- 「苦労より満足感を得た編集長の仕事」
- 後藤先生も AFS 掲載の記事 (馬淵東一氏) に感銘を受ける
- 松前健氏とのエピソード (英語論文の直し)
- 大林太良氏
- Asian Folklore Studies から Asian Ethnology へ
- Asian Ethnology 共同編集長 Benjamin Dorman について

<https://asianethnology.org/page/podcastoneknecht>

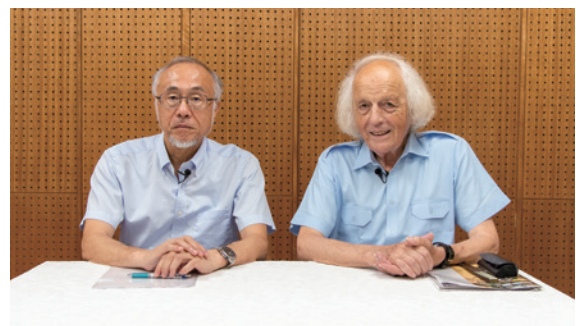
(ドーマン・ベンジャミン)



撮影の準備

映像はこちらからご覧いただけます。

- クネヒト先生対談 (Connect to クネヒト) 第1回目  
<https://vimeo.com/371542620>
- クネヒト先生対談 (Connect to クネヒト) 第2回目  
<https://vimeo.com/391910463>
- Asian Ethnology Podcast のインタビュー



対談を終えたクネヒト先生と後藤先生

## 《2019 年度国際化推進事業》 国際公開シンポジウム・エクスカージョン実施報告

高村美也子 (人類学研究所・国際化推進事業・研究員)

### 公開国際シンポジウム実施報告

南山大学人類学研究所による国際化推進事業は、2015 年度から 2017 年度が南山大学国際化推進事業（第 3 期）、2018 年度から 2020 年度までが南山大学国際化推進事業（第 4 期）として実施されてきた。

2015 年度から 2017 年度の第 3 期「在地的人類学に向けたアジア人類学者ネットワーク構築」では、特定の社会を「災害とともに生きる場」として長期的にとらえる必要性を見出した。第 3 期では、南山大学を中心に日本国内公開シンポジウムを実施し、国際シンポジウムもフィリピン、インドネシア、インドより研究者をお招きして、南山大学で 2017 年 10 月 2 日に開催した。

第 4 期は、「自然災害と共に生きるための知恵」というテーマで 2018 年より走り出した。第 3 期の国際シンポジウムは日本で開催したが、第 4 期ではフィリピンで開催した。フィリピンでの開催は、第 3 期の国際シンポジウムで協力してくださった研究者とのご縁で可能となった。海外でシンポジウムを開催するため、2018 年 10 月に私がフィリピンへ視察調査に行った。日本国内においては、同年 12 月に公開シンポジウムを実施し、当プロジェクトの活発化を図った。そして、2019 年 10 月にフィリピン大学デリマンにて国際シンポジウムを開催することに至った。

国際公開シンポジウムは、南山大学人類学研究所主催、インターナショナルスタディーズセンター・フィリピン大学デリマンの協力の下、10 月 5 日と 6 日の

2 日間で開催された。フィリピン、インドネシア、インド、ネパール、日本の事例を通し、自然災害発生後の復興の取り組み、特に被災地住民による取り組みに対する外部組織との関わりについて議論が行われた。参加者は、シンポジウムの発表者 9 名、フィリピン大学の学生、日本からの留学生、フィリピン大学のスタッフの合計 55 名であった。参加者の国籍は、フィリピン、インドネシア、インド、日本であり、アジア 4 かが揃った。

フィリピンの事例においては、1991 年に噴火したルソン島パンパンガ州ピナトボ火山による被災後の住民による取組と政府との関係性、および 2004 年に起こった津波の影響によるココヤシ栽培継承の断念によって引き起こされたレイテ島の人々の暮らしの変化について報告が行われた。インドネシアの事例においては、気象変化と地盤沈下に関する住民の新しい技術適応について報告があった。インドの事例においては、2004 年に起こった津波による人災ともいえる被害に対する漁民の苦悩について報告があった。ネパールの事例においては、2015 年に起きた大地震への女性組織の取り組みについて報告があった。日本の事例においては、岐阜の木曾三川輪で発生してきた洪水によって構築された輪中文化と現在の住民かつ政府との関係性、および 2011 年の東日本大震災の復興に対する地元住民の取り組みについての報告があった。

当シンポジウムでは、フィリピン大学で日本文化を学んでいる学生による文楽の披露も行われた。また、シンポジウムの開催前日には、海外からの参加者へ



の歓迎として親睦会が開催された。シンポジウムの開催中には、フィリピンの料理を中心とした朝食、昼食、ブレイクタイムのスイーツが提供された。食事以外にも、海外ゲストを歓迎する名前入りの垂れ幕が用意されていた。

これらは、国際シンポジウムの開催とゲストに対する歓迎として、フィリピン大学インターナショナルスタディーズセンターのご好意で実施された。これらの好意を通して、フィリピンの「おもてなし」を感じることができた。



シンポジウムの様子



フィリピン大学の学生による文楽の披露

## エクスカーション：被災地視察

シンポジウム閉会后、10月7日(日)にルソン島パンパンガ州にあるピナトゥボ火山の噴火によって被災した地域の復興事業を行っているプニング・ホット・スプリング・レストラン (Puning Hot Spring and Restaurant) と、パンパンガ州アンヘレス市サパング・バト・シティオ・ターゲット村 (Sitio Target, Brgy. Sapang Bato, Angeles City, Pampanga) へ視察を行った。

フィリピンは、日本と同じように毎年台風に見舞われているが、フィリピン大学のザヤス教授 (Cynthia Zayas: Center for International Studies, University of the Philippines) の推薦により、ルソン島パンパンガ州に位置する1991年に噴火したピナトゥボ火山の被災地に行くこととなった。

当視察旅行は、本シンポジウムの発表者であるザヤス教授、サラ・レイムンド、インターナショナルスタディーズセンター所長・教授 (Sarah Raymundo: Center for International Studies, University of the Philippines)、ノーマン・キング、パンパンガ農業州立大学講師 (Norman King: Pampanga Agricultural State College)、およびピナトゥボ山エコツーリズム・ゴールデントレイル・アドベンチャー (Mt. Pinatubo Eco Tourism Sites via Golden Trail Adventures) の協力の下、実施された。

## ピナトゥボ火山の噴火被害による居住地移動

本国際公開シンポジウムでは、フィリピンからの全発表者 (レイムンド所長、ザヤス教授、キング氏) が、このピナトゥボ火山噴火で被害を受けたアイタの人々について発表していただき、災害当時の様子とその後の復興作業における政府との摩擦など、被災地の現状を事前に知った上で、視察することができた。

1991年に発生したピナトゥボ火山の噴火は400年ぶりであり、多くの人々が犠牲になり、フィリピンにとって大きなインパクトのある災害であった。多くの人々が居住地を失い、フィリピン政府、NGOが、再定住地提供に向けて支援を行った。アイタの人びとは、山間部から平地へ移動し、現在も移動先に滞在している (佐々岡・牧・大津山 2019)。

## パンパンガ州 ピナトゥボ火山噴火の被災地へ

10月7日朝7時、フィリピン大学ディリマン校に国際公開シンポジウム関係者13名が集まった。朝食

休憩も含めて3時間ほど車に乗り、10時頃にピナトフボ山エコツアーリズム・ゴールデン・トレイル・アドベンチャー事務所に到着することができた。この施設では、キング氏が我々一行を迎え入れてくれた。

ゴールデン・トレイル・アドベンチャー事務所で、我々は乗ってきたワゴン車から4輪駆動車に乗り換え、火山噴火被災地域へと向かうこととなった。

ゴールデン・トレイル・アドベンチャーが案内する火山噴火被災地とは、噴火によって火山灰が積もった川底を利用したアドベンチャーツアーと、火山がもたらす恵である温泉施設が建設されて、観光化された場所である。火山噴火が起こる前は、山の谷間が深く、且つ川底も深かったため、レジャーとして楽しめるわけではなかったが、火山灰が蓄積したことから川底が浅くなり、4輪駆動車が走れるようになり、その地形変化を利用してレジャー施設へと開発されたとのことである。

観光地化された場所のツアー用地図を見ると、火山灰の道を通り、滝3か所を見学し、河川を通過し、途中からトレッキングをして、噴火口の湖に到着することができるようになっている。ただし、我々一行は、

時間の都合上、途中の温泉施設であるプニング・ホット・スプリング・レストラン（Puning Hot Spring and Restaurant）を最終目的地とした。

我々は車3台に分かれ、各々ヘルメットを被り、事務所からプニング・ホット・スプリング・レストランまでの40分ほどの道りを出発した。被災地に入るまでにコンクリートで舗装された細い道を通り、その後、火山灰が積もった河川へと向かった。河川への入り口には、ツアーのレジャー施設の一つであるスパ（Spa）がある。スパを通過すると、河川の中に入っていく。

河川と言っても、水深2cm～5cmほどの浅瀬が続いている。この浅い水深を利用して、4輪駆動車でアドベンチャーを楽しめるようになっている。4輪駆動車は、時折猛スピードを出し、水しぶきを上げ、我々一行を楽しませてくれた。我々も、そのスピードと車の揺れに負けずと車にしがみつ、そのスリルを味わった。そのスリルの中でも、大噴火が作り出した山の岩壁や、河川に落ちている岩などを確認し、自然災害の威力を感じることができた。



プニング・ホット・スプリング温泉施設

## プニング・ホット・スプリング・レストラン (Puning Hot Spring and Restaurant)

我々は、プニング・ホット・スプリング・レストランに到着すると、被災地再利用の現場を視察した。

当施設は、韓国の企業が携わっていることもあり、視察当日の客の多くは、韓国からの人びとであった。まるで棚田のように10ほどの温泉風呂が美しく配置されている。我々一行は、温泉風呂に入ることはなかったが、足湯を楽しむことができた。温泉風呂ばかりではなく、高台には韓国の人びとが集う礼拝堂も整っており、韓国系の客の多くが高台まで上がり、礼拝をおこなっていた。

当施設は、山の斜面を削って建てられているため、高台にある温泉施設から「火山灰が覆いかぶさって被災した土地」を眺めることができ、自然の回復力と人的開発の状況を一望することができる。パンフレットやFacebookを確認すると、当施設が被災したアイタの人びとを雇うことで、被災した人々に対する雇用提供にも繋がっていることが示されている。

## アイタ自らの取り組み

国際公開シンポジウムでは、発表者3名からアイタ居住地域復興に関して報告があり、地元住民の伝統文化・信仰と政府側が進める復興との摩擦に関する内容が提示された。アイタの人々は、山・森と共に暮らし、自然とコミュニケーションを取りながら暮らしてきた。山で暮らすことから生まれた継承すべき伝統が培われ、その中にはタブーも存在している。暮らしてきた山には先祖の霊が存在すると信じられており、その「山」を重要視している。ただし、ピナトゥボ火山噴火の被害により、現在、人々は再定住地で暮らしている。一方、将来的には「山」に帰ることを願っている。しかしシンポジウムで共有された通り、政府が推奨する対策は、アイタの人々が望んでいる対策ではないという。そのためアイタの人々は、独自の取り組みを行っていた。

その取り組みとは、土地のリゾート化を目的とした外部からの投資への関与の他に、自らブルドーザー

やシャベルカーを運転し、蓄積した火山灰を整備し、道を作り、山で暮らす準備をすることであると、私が2018年に事前視察に行った際に説明を受けた。ただし、その後大雨に見舞われ、火山灰でつくられた「道」は崩壊してしまい、2019年の今回の視察の際には、人が山に入ることはできなくなっていた。

## 視察を終えて

今回視察を行ったピナトゥボ火山被災地では、ピナトゥボ火山が400年ぶりに大噴火を起こし、甚大な被害を人々に与え、かつ火山灰が堆積したために山の地形さえも変えてしまった。火山噴火の後、政府、NGOなどが、被災地域居住のアイタの人びとの復興に支援を行っている。外部支援は、一定の効果はあるが、アイタの人びとの望みをすべて叶えるものではない。アイタの人々は、ピナトゥボ火山噴火で被災したアイタの元居住地である山間部へ戻りたい、先祖の霊が存在する場所へ戻りたい、という強い意志の下、復興を目指して取り組んでいることを確認することができた。

アイタの人びとの希望を持ち続ける姿勢、希望を自ら叶えるための取り組みを目の当たりにし、自然災害の後、いかに人びとが外部支援と協力し、且つ、地域住民が必要としている望みを叶えるために自ら取り組みを実践することが重要であるかを学ぶことができた。

最後になるが、国際公開シンポジウムの開催を受け入れてくださり、且つ、当視察旅行を計画して下さったフィリピン大学のザヤス教授、インターナショナルスタディーセンター所長のレイムンド教授、発表者であり且つアイタの取り組みを実践しているキング氏、アイタ・コミュニティ長、フィリピン大学のスタッフには、心から感謝を申し上げたい。

### 参考文献

佐々岡慶介・牧紀男・大津山堅介 2019 「フィリピン・ピナトゥボ火山噴火災害に伴う再定住地の上記復興に関する研究」『日本建築学会技術報告書』25(59)、pp.367-370。

## 人類学フェスティバル 2019

人類学研究所では毎年秋に、人類文化学科との共催で人類学フェスティバルを開催しています。2019年度は、10月27日(日)にキリスト教センターにて、4つの企画をおこないました。当日は天候にも恵まれ、開場前から多くの人にお集まりいただきました。

### ECフィルム上映「東南アジア山地民の暮らしを彩る手仕事」 (企画：人類学研究所)

ECフィルム(エンサイクロペディア・シネマトグラフィカ)とは、ドイツの国立科学映画研究所が1952年から30年近くかけて撮影した映像による百科事典です。貴重な世界各地の民族誌資料となる記録から、今回は、タイ山地民の手仕事に関する映像を上映しました。

上映したのは、モンの大麻布づくりや銀細工、ロウケツ染め、アカの家屋建築、アカと蒙の籠編み、紐編み、トウモロコシの脱穀と製粉などの映像で、いずれも1960年代に撮影された貴重な映像です。ECフィルムには解説などが入っておらず、ただひたすら人びとが淡々と作業をおこなっている様子が映し出されます。そのため、手仕事やものづくりの過程や手順そのものをじっくりとみることができます。

タイ山地民と共通点の多い中国雲南省の少数民族地域で調査研究をおこなっている私にとって、初めてみることでできた作業もありますし、また今に繋がる部分を感じることもできました。見学に来てくれた方々にとっては、特に布づくりの過程そのものが新鮮に映ったようです。「家屋建築の映像は、家ができていくことが予想できるが、布づくりの過程は、何のために

この作業をやっていて、それが布にどう繋がるのかが予想できない」という意見もあり、解説を加えながら楽しく観賞することができました。

(宮脇千絵)



ECフィルム観賞

### 星空人類学 2019

(企画：人文学部人類文化学科・後藤明ゼミ)

星空人類学とは、ギリシャの神話に偏りがちの星座について、世界の他の民族はどのように星座を捉え、名前を付け、またその背景にどのような物語をもっているか、あるいは農業や漁業のカレンダーとして使っていたか、さらに船乗りが航海術の方位として使っていたことなどを参加者に体験してもらう企画である。数メートルのエアドームはどこにでも設置する

ことができるので、プラネタリウムショーを行う場所（大学キャンパス）から出発してその日の星空を眺め、さらに緯度を移動し北海道のアイヌ、アラスカ（極北）のイヌイト、あるいはポリネシア人（赤道）、あるいはインカ人（南半球）などに移動して、異なった星空と星に関する伝承を体験できるようにした。

また時間を遡り、5000年前のギザのピラミッド、英国のストーンヘンジ、あるいは大湯の環状列見期が時代の、特別な日の大王、たとえば夏至の太陽が遺跡のどこから昇るか、実際の遺跡の画像を地平線に投影して臨場感あふれる体験ができるようにした。

プログラムは完全オリジナル盤で、コンピューター制御なのでスクリプトを使って世界中、また過去や未来の星空が再現できる。投影する遺跡景観や環境画像は講師や学生が実際にとったものを使った。その解説は大学で行う場合、すべて学生が担当する。同じゼミの学生は星空人類学の内容に関連する展示とワークショップを担当し、「プラネリウム+展示+ワークショップ」の三本立てで市民に人類学を面白く提供するのが目的である。

なおその延長で講師は宮崎県日向市や北海道標津町の市民イベントにオリジナル・プログラムを作っ

て貢献している。

（後藤明）



星座色ハンドソープづくり

## 中国皇帝たちの世界観— 古代都市と陵墓 —

（企画：人文学部・人類文化学科 2019 年度「フィールドワーク（文化人類学）」参加者および大学院人類学専攻西江ゼミ生）

「フィールドワーク（文化人類学）」は、人類文化学科が開催するフィールドワークを学ぶための授業であり、日本国内のほか海外を調査地として実施し



プラネタリウムのドームを背に（星空人類学）

ている。2019年度には中国考古学の西江が授業の責任者となって、中国陝西省の関中平原を調査地として実施された。現地の調査旅行では人類学研究所所長でもある渡部が学生を引率した。関中平原は現代の地方都市である西安市を中心とした地域で、中国古代の西周王朝、秦王朝、前漢王朝、隋唐王朝の首都がおかれた歴史の舞台である。人類学フェスティバルの展示では、この調査旅行中に視察した歴代皇帝たちの陵墓や古代王都の遺跡を題材として、参加した学生たちによる研究発表が披露された。

秦始皇帝陵・兵馬俑などの世界遺産をふくむ現地調査の記録、あるいは最新の発掘調査に関して現地の研究者から受けたレクチャーなどに基づいて、青銅器、古代文字、古代祭祀遺跡、皇帝陵墓などをテーマとした研究発表がおこなわれた。会場では貴重な遺跡の写真、採集した土器片、秦始皇帝時代の古代文字拓本などが展示され、家族連れなどさまざまな来訪者を楽しませていた。

参考：2019年海外フィールドワーク報告書『中国陝西省関中平原を歩く—古代都城と王陵の踏査—』南山大学人文学部人類文化学科、2019。

(西江清高)

## RePurposed 富洲原—ギョギョっと編みだそう—

(企画：2019年度南山チャレンジプロジェクト採択団体 RePurposed 富洲原)

廃棄寸前の漁網、魚を取る網の再活用を目指す学生団体「RePurposed 富洲原」(2019年4月設立)の活動の一環として、ミサガワークショップのイベントを行いました。私たちの活動の柱は、アップサイクルです。アップサイクルとは、もう使えなくなってしまった物、役目を果たした物、必要とされなくなった物に何か工夫を加え、新たな価値を吹き込むことで再び違った形で活躍、利用できるようにすることです。

団体の代表の祖父の使用されなくなった漁網工場(三重県四日市市富洲原)に使われなくなった漁網がたくさんあり、この漁網をただ廃棄するだけでいいのか、どうにかできないのかと思ったのがこの団体発足のきっかけです。それと同時に今は衰退してしまったが、かつて漁網で栄えたこの地の現状、文化、歴史など、普段生活するうえでは触れることの少ないであろうこのようなことと、アップサイクルという概念をこの活動を通して少しでも多くの人に伝え何かのきっかけになればと思い活動してきました。



写真パネルの展示と学生の発表  
(中国皇帝たちの世界観)

人類学フェスティバル当日は、多くの来場者が漁網を用いたミサンガ作りに参加してくれ、大盛況でした。



大盛況のミサンガづくり (RePurposed 富洲原)

これは一般的なミサンガとは異なり、漁網用の糸で作っているので、ほぼほぼ切れません(笑)。切れないミサンガに願いを込め続けることをコンセプトとしています。また、ワークショップの会場では、富洲原や廃棄寸前のものに再び価値を与えるアップサイクルという用語に関する説明用のパネル展示も行いました。

人類学フェスティバルは僕たちとしては初めてのイベント出店で、大切な思い出となっています。

(南山大学総合政策学部・RePurposed 富洲原代表 吉田凱一)

南山大学人類学研究所

# 人類学フェスティバル 2019

南山大学キリスト教センター(旧ロゴセンター)

主催: 南山大学人類学研究所  
共催: 南山大学人文学部人類文化学科

2019年 10月27日 SUN. 10:00~17:00

★ 星空人類学 2019 ★  
Presented by 星空研究社  
プラネタリウム上映: 11~16時の毎時00分開始  
(事前予約 ⇒ planetarium.gotocenter2019@gmail.com)  
ワークショップ「あなたは何色? 星色ペンダントづくり」  
天文と文化に関する展示も実施  
※: 中央ホール、12講義室

★ RePurposed 富洲原 ★  
Presented by 南山チャレンジプロジェクト  
商業漁網を使ったアップサイクルをおこなっています!  
\*ミサンガ作成ワークショップ  
\*コースターやバッグ等のアップサイクル製品の販売  
※: 図書室

★ ECフィルム上映 ★  
「東南アジア山地民の暮らしを彩る手仕事」  
Presented by 人類学研究所  
ダイナミックに撮影した映像による百科事典を頼る貴重な機会!  
①モンの大木を刈り、空を飛ぶ織工のアップサイクル  
②アカの家屋建築、③モンとアカの暮らしの道具  
※: 13講義室

★ 中国皇帝たちの世界観 ★  
Presented by 西江高直也  
2019年度、学生によるフィールドワーク実習の成果を、写真・パネル、DVDで解説!  
※: 食堂

★ 入場無料 どなたでもお越しください ★

★ 各会場の詳しい案内は、それぞれのポスターやホームページをご覧ください (星空人類学2019は事前予約がオススメです) ★

★ 南山大学人類学研究所 ★  
E-mail: ai-nu@ic.nanzan-u.ac.jp Phone: 052-832-3111(代表)  
HP: http://rci.nanzan-u.ac.jp/jnruiken/ FB:「人類学研究所」で検索

南山大学人類学研究所

ECフィルム上映

## 東南アジア山地民の暮らしを彩る手仕事

人類学フェスティバル2019

2019年10月27日(日)  
南山大学  
キリスト教センター 13講義室

★ 映像による百科事典 エンサイクロペディア・シネマトグラフィカ (ECフィルム) ★  
1952年から約30年かけて、ドイツ・国立科学博物館所が撮影・制作した3000巻の映像アーカイブ。そこには貴重な世界各地の民族誌資料となる記録が残されています。日本では、予定記念館にて、このフィルムセットの映像が整理・活用されています。

★ 上映スケジュール ★

① 10:20 ~ 10:52	② 11:00 ~ 11:31	③ 11:45 ~ 12:04	④ 12:15 ~ 12:48
⑤ 13:40 ~ 14:12	⑥ 14:20 ~ 14:51	⑦ 15:05 ~ 15:34	⑧ 15:50 ~ 16:23
⑨ 16:30 ~ 17:02	⑩ 17:10 ~ 17:42	⑪ 17:50 ~ 18:22	⑫ 18:30 ~ 19:02

★ 入場無料 予約不要 どなたでもお越しいただけます ★

南山大学人類学研究所  
E-mail: ai-nu@ic.nanzan-u.ac.jp Phone: 052-832-3111(代表)  
HP: http://rci.nanzan-u.ac.jp/jnruiken/ FB:「人類学研究所」で検索

星空人類学(入場無料)

2019.10.27(日) Open 10:00

★ アナタのタイム ★  
上映時間:  
11:00 ~ 12:00 ~ 13:00 ~ 14:00 ~ 15:00 ~ 16:00  
\*開演時刻は15分前に実施されます。

★ ワークショップ ★  
※事前予約あり | 7:30 星空センター(旧ロゴセンター)

★ 会場のご案内 ★  
★ 南山大学キリスト教センター(旧ロゴセンター) ★

★ 主催: 南山大学人類学研究所  
共催: 南山大学人文学部人類文化学科  
協力: 星空研究社 | 人類学的視点で環境問題についてのアナタの心  
資料: 星空研究社 | 自然環境の大切さを伝える  
協力: メディアアート・デザイン・デザイン

南山プロジェクト採択団体

## RePurposed 富洲原

漁網でミサンガ作ってみませんか?

★ 活動紹介 ★  
廃棄漁網を使ったアップサイクルを行う団体です。  
【アップサイクルとは?】一度使い道がなくなったものに再び役割を与え、新たな用途を生み出す事です。環境保護につながる取り組みとして注目されています!

★ イベント内容 ★

- ミサンガのワークショップ (参加無料 随時受付)  
※ご自身で作ったミサンガをお持ち帰りいただけます。
- オリジナルミサンガ (参加費: 郵送料のみ(370円) 随時受付)  
※スタッフが皆さんのリクエストに応じてオーダーメイドで作成し、後日郵送させていただきます。
- その他  
コースター、バッグ等のアップサイクル製品販売

★ 【日程】 ★  
2019年10月27日(日)  
10:00~16:30  
【会場】  
南山大学ロゴセンター1階図書室  
【主催】  
南山大学人類学研究所  
【共催】  
南山大学人文学部人類文化学科、南山チャレンジプロジェクト

★ 【団体LINEアカウント】 Tomisuhara0422  
★ 【団体メールアドレス】 tomisuhara\_repurposed@yahoo.co.jp  
★ 【団体facebookアカウント】 QRコードを参照

南山大学人類学研究所  
Anthropological Institute, Nanzan University

特集

## 土器の三次元計測

中尾央 (人文学部人類文化学科・人類学研究所)・中川朋美 (人類学研究所・博士研究員)

2019年度から、人類学研究所・第二種研究所員である中尾央先生が代表を務める科学研究費助成事業・新学術領域が始まりました。その研究内容について紹介させていただきます。

2019年度に、新学術研究領域「出ユーラシアの統合的人類史学 - 文明創出メカニズムの解明 -」が採択され、中尾は計画研究班「三次元データベースと数理解析・モデル構築による分野統合的研究の促進」(C01班)の代表を務めている。また、中川はこのプロジェクトの博士研究員として雇用されている。2019年度末からはまず、考古遺物の三次元計測を中心に進め、計測されたデータを数理的に解析することで、遺物の拡散プロセスを定量的に考察しようと試みている。

手始めに計測を開始しているのが、弥生時代前期の遠賀川式(系)土器である。日本考古学ではよく知られている通り、遠賀川式(系)土器とは農耕の拡散と共に日本各地に伝播したと想定されている、比較的斉一性の高い土器群である。実際、遠賀川式(系)土器は北部九州の板付遺跡周辺から始まり、東海地方に至るまで、さまざまな地域で発見されている。本研究班では、この土器群に関して、まずはその三次元データを計測・取得し、取得されたデータを数理的に解析して北部九州

からの拡散・伝播プロセスを定量的に検証しようと考えている。本稿執筆時までに計測を終了した著名な遺跡、また計測予定の遺跡(の一部)は図1を参照して欲しい。



- |            |             |
|------------|-------------|
| ①月繩手遺跡     | ⑥田村遺跡       |
| ②雲宮遺跡      | ⑦綾羅木郷遺跡     |
| ③若江北、田井中遺跡 | ⑧菜畑、曲り田遺跡   |
| ④津島遺跡      | ⑨板付、雀居、今川遺跡 |
| ⑤下川津遺跡     | ⑩西川津、矢野遺跡   |

図1 計測済み・予定の著名遺跡。  
場所はおおよそのものであり、正確ではない。



土器の三次元計測には、主に2種類の方法を用いている。1つ目がレーザースキャナー、2つ目がSfM (Structure from Motion) と呼ばれる写真からの3次元モデル構築である。1つ目のレーザースキャナーについては、方法自体はシンプルで、それぞれ遺物にレーザーを当てて計測するだけである(ただ、レーザーの反射を計算するためのターゲットシールをうまく配置する必要がある)。現在使用的是 Creafom 社の HandySCAN BLACK™ |

Elite というもので、計測精度は公称 0.025mm、実際土器を金尺で計測した結果と比較しても、ほとんど誤差は見られない(図2)。計測速度もかなりのもので、遠賀川式(系)土器のサイズ(高さがおおよそ 20cm ~ 30cm 程度、幅・奥行きが 10 ~ 20cm 程度)のものであれば、最終的な合成時間を除けば 10 ~ 20 分程度で計測が終了する。合成時間もデータのクリーニングを含め、おおよそ 10 ~ 20 分程度である。また、計測時に計測結果を同時

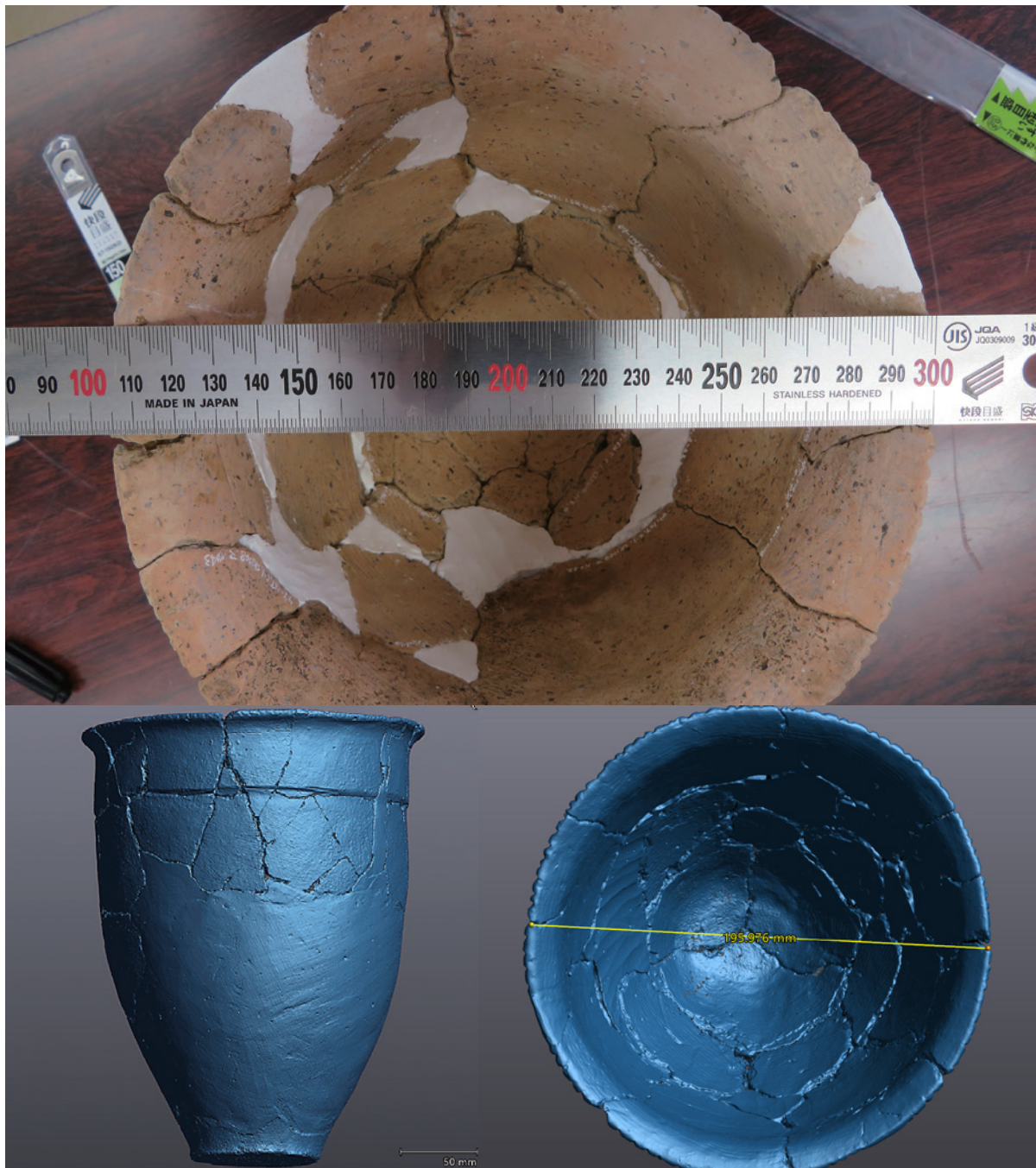


図2 田村遺跡出土土器の三次元計測結果から。  
スケール情報は自動的に計算される。

に確認できるという利点もある（これは、後述する SfM にはできない）。問題をあげるとすれば、スキャナーの価格自体が相当なもので、そう簡単に購入はできない、という点だろうか。

もう一つが SfM である。こちらは一定の機能を備えたデジタルカメラ、そして Metashape（旧 Photoscan）というソフトがあれば、基本的には計測が可能である（図 3）。したがって、先述したスキャナーよりはるかに汎用性は高い。ただ、撮影した写真を Metashape で処理する際、若干時間がかかってしまうため、計測スピードはあまり早くはない。遠賀川式（系）土器でも、撮影された写真から実際に三次元モデルが構築できるかどうかを現場で簡単に確かめるために、おおよそ 20～30 分の時間を要する（この時間はパソコンのスペックにも依存するため、GPU（グラフィックボード）や CPU などが貧弱な場合、さらに時間がかかることもある）。撮影時間を含めると、1 時間に 2 個計測できれば良い方である。現在使用しているパソコンは GPU に NVIDIA 製の GeForce RTX 2070 Super、CPU に Core i7-10750H を搭載したものであり、これを用いて現場での確認を行なっている。

また、写真をうまく撮影しないとうまくモデルが構築できなかったり、構築されたモデルも最初は余計なゴミがそれなりに残っており、それを除去するのにスキャナーより時間がかかるのも確かである。なので、実際に三次元モデル一つを作るのに、撮影時間も含まれば合計 2 時間程度は必要

になるだろうか。しかし、スキャナーよりはるかに手頃で汎用的である点は、非常に魅力的である。さらに、SfM の場合は色・テクスチャー情報も取得できるため、それも現在使用しているスキャナーにない利点である。ただ、さらにお金を積めば、色情報を取得できるスキャナーもある。価格はそれこそ桁違いなものになるが。

これらの手法を用いて取得されたデータについては、解析などを踏まえて論文を出版した後、理化学研究所のサーバーをお借りして、そこで公開する予定である。

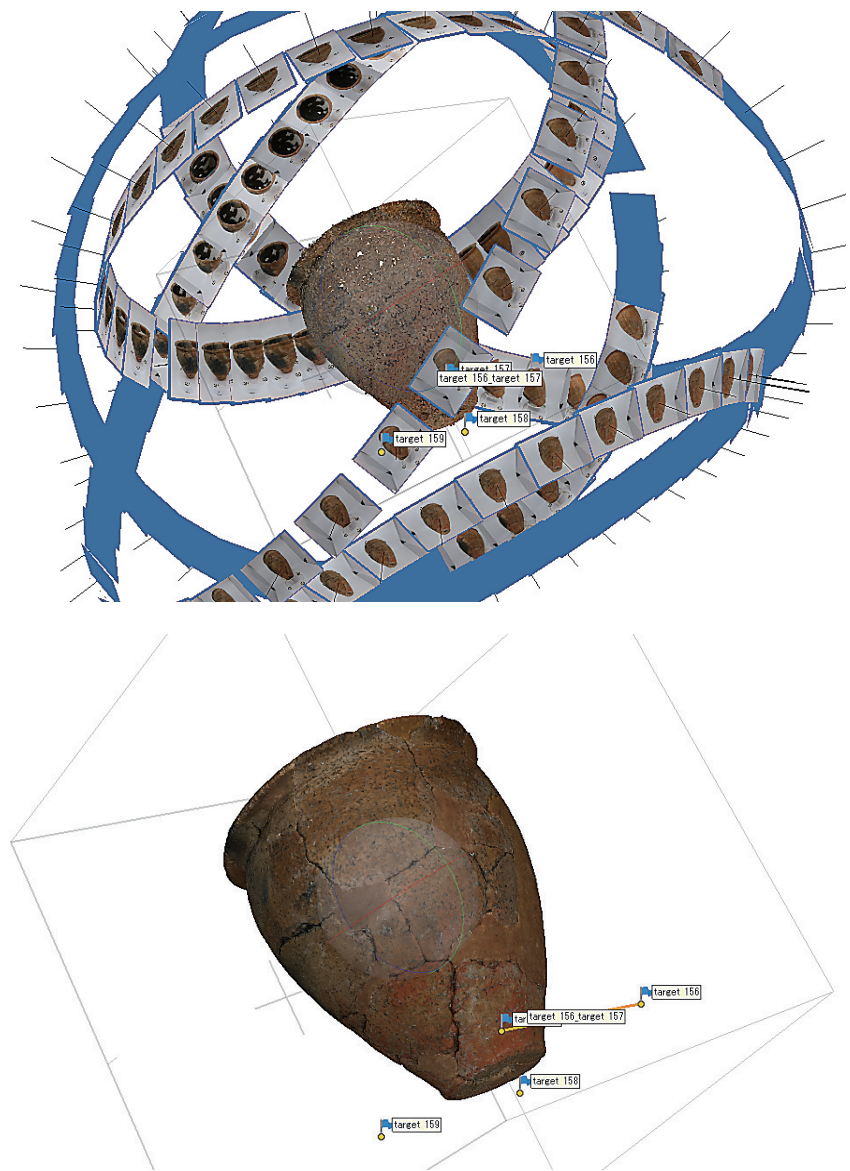


図 3 Metashape による三次元モデル構築。  
 上が様々な角度から撮影された写真を配置した状態で、  
 下がその写真から構築された三次元モデル。こちらも田村遺跡の土器。

# 活動報告 【2019年度】

## シンポジウム

### 第1回 公開シンポジウム 人類学と博物館—民族誌資料を どう研究するのか？ (人類学研究所設立70周年 記念事業関連)



- 日時** 2019年12月21日(土)  
13:30～18:00(開場13:00)
- 会場** 南山大学R棟 R49教室
- 主催** 南山大学人類学研究所
- プログラム**
  - 13:00 あいさつ 後藤明(南山大学人文学部・教授/人類学研究所・第二種研究員)
  - 13:35 趣旨説明 宮脇千絵(南山大学人類学研究所・第一種研究員/准教授)
  - 13:45 基調講演「人類学と博物館—これまでとこれから」吉田憲司(国立民族学博物館・館長)

- 14:30 休憩
  - 14:40 報告1「物質文化研究の視点から」後藤明(南山大学人文学部・教授/人類学研究所・第二種研究員)
  - 15:00 報告2「民具研究の視点から」久保禎子(一宮市尾西歴史民俗資料館・学芸員)
  - 15:20 報告3「考古学の視点から」黒沢浩(南山大学人文学部・教授)
  - 15:45 人類学博物館見学
  - 16:30 総合討論(司会:黒沢浩)
  - 18:00 終了
- 司会** 宮脇千絵(南山大学人類学研究所・第一種研究員)

詳しい報告は特集ページに掲載しています。  
なおこのシンポジウムは当初7月27日(土)に開催予定であったが、台風6号接近のため12月21日に変更となった。

### 第2回 公開シンポジウム 国際シンポジウム Wisdom for Living with Natural Disasters – Initiatives of Local Residents in Response to Changes in their Society – (国際化推進事業「自然災害と 共に生きる叢智」関連企画)

- 日時** 2019年10月5日、6日
- 会場** フィリピン大学ディリマン University Hotel セミナールーム “Patio Annex”
- 主催** 南山大学人類学研究所
- 協力** フィリピン大学

プログラム 2019/10/5

(Session 1 : Learning from Disaster)

[Folk Beliefs as Resource Management] Sarah Raymundo(Center for International Studies, University of the Philippines)

[In kinship There is Security: Ayta Resilience in Times of Disasters] Cynthia Zayas (Center for International Studies, University of the Philippines)

[LANAB Beneficial, Dangerous, and Destructive Flooding] Norman King (Pampanga Agricultural State College)

[Struggling to Fish :Marginalization and Communication in the Fishing Villages of North Tamil Nadu in the Post-Tsunami Period] Gopalan Ravindran (University of Madras)

[Comments] Akira Goto (Anthropological Institute, Nanzan University)

Discussion

2019/10/6

(Session 2 : Initiative for Rehabilitation by Local Residents or community)

[Disaster Culture on “Waju”] Etsuko Shimomoto (Nihon Fukushi University)

[Catastrophic Disaster Causing Separation of Culture and Loss of History :Museum Activities by University Students for “Build Back Better” of Local Culture] Koji Kato (Musashino Art University)

[The Roles of Women's Self-Help Organizations in the Process of Civil Reconstruction after the April 2015 Nepal Earthquake] Ai Takeuchi (Research Fellowship for Young Scientists of Japan Society for the Promotion of Science / Nanzan University)

[Community Responses to Climate Change and Land Subsidence :The Cases from Probolinggo, East Jawa and Tambak Lorok, Semarang, Central Jawa, Indonesia] Dedi Adhuri (Indonesian Institute of Sciences)

[Disaster, Discipline, Drugs and Duterte : Transformation of Moral Subjectivities in Coconut Communities, Leyte] Wataru Kusaka (Nagoya University)

[Comments] Cynthia Zayas (Center for International Studies, University of the Philippines)

Discussion



詳しい報告は特集ページに掲載しています。

第3回 公開シンポジウム  
記念シンポジウム  
人類研の歩みと人類学の未来  
(人類学研究所設立 70 周年  
記念事業関連)

- 日時 2019年12月7日(土)  
シンポジウム  
13:30 ~ 17:30 (開場 13:00)  
懇親会  
18:00 ~ 20:00
- 会場 シンポジウム  
南山大学 S 棟・S21 教室  
懇親会  
南山大学 S 棟 3 階 BISTRO CEZARS
- 主催 南山大学人類学研究所
- 共催 中部人類学談話会
- プログラム 13:30 学長挨拶 鳥巢義文 (南山大学・学長)  
13:35 趣旨説明 渡部森哉 (南山大学・教授 / 人類学研究所・所長)  
13:40 「ドイツ語圏人類学における P・W・シュミット」 山田仁史 (東北大学文学部・准教授)

- 14:25 「Missionary and Anthropologist, a Contradiction?」 クネヒト・ペトロ (南山大学・元教授／人類学研究所・元所長)
- 15:10 c 休憩
- 15:30 「人類研の目指したものと、そして目指すべきもの」 後藤明 (南山大学・教授／人類学研究所・第二種研究所員)
- 16:00 コメント 伊藤垂人 (東京大学・名誉教授)
- 16:20 休憩
- 16:30 総合討論
- 17:30 閉会のあいさつ 吉田竹也 (南山大学・教授／人類学研究所・第二種研究所員)
- 18:00 懇親会 (無料)
- 司会 宮脇千絵 (南山大学・准教授／人類学研究所・第一種研究所員)



詳しい報告は特集ページに掲載しています。

## 第4回 公開シンポジウム 国家なき都市と都市なき国家 —古代文明を「再構築」する—

- 日時 2020年2月24日(月)  
13:00～18:30
- 会場 南山大学Q棟・Q103教室 (キャンパスマップ)
- 主催 南山大学人類学研究所
- 共催 南山大学人文学部
- 協力 科学研究費補助金・新学術領域「出ユーラシア」A03班

- プログラム
- 13:00 趣旨説明
- 13:10 発表1 (発表時間30分、質疑応答10分)  
「都市から国家へ—メソポタミアの社会変遷—」 小泉 龍人 (メソポタミア考古学教育研究所 代表)
- 13:50 発表2 (発表時間30分、質疑応答10分)  
「中国初期王朝時代の都城をめぐる」 西江 清高 (南山大学 教授)
- 14:30 休憩
- 14:45 発表3 (発表時間30分、質疑応答10分)  
「都市なき倭人は国家をめざしたのか—弥生・古墳都市論と国家形成論の現在—」 寺前 直人 (駒澤大学 教授)
- 15:25 発表4 (発表時間30分、質疑応答10分)  
「社会統合と差異化の狭間で—古代メソアメリカ文明における都市の起源—」 村上 達也 (テュレーン大学 Associate Professor)
- 16:05 発表5 (発表時間30分、質疑応答10分)  
「古代アンデス文明の神殿と国家」 渡部 森哉 (南山大学 教授／人類学研究所 所長)
- 16:45 休憩
- 17:00 ディスカッション



本シンポジウムは、考古学の立場から都市について再考する目的で開催された。企画立案者である2人(村上、渡部)はアメリカ大陸の考古学を専門と

しており、旧世界と新世界の比較という大きな枠組みを軸としてシンポジウムの構成を考えた。西アジア、ヨーロッパの事例を基に組み立てられたチャイルドのモデルは、現在批判され、修正を迫られている。しかし今になっても批判されるということ自体、そのモデルの意義を示している。チャイルドのモデルを踏まえつつ、都市を再検討するため、まず都市と国家を概念として分離すること、そして社会の複雑化を縦方向の階層化のみならず、横方向の複雑性にも着目するという視点を提示した。

最初の登壇者の小泉氏はメソポタミアの事例を手際よく解説した。チャイルドのモデルが比較的良好ではまる事例であり、現在の研究状況を概観した。続く西江氏の発表は中国の都城についてであり、西アジアと東アジアの違いを意識した発表となった。そして日本について寺前氏が講演した。いわゆる二次国家が形成された日本列島における現在の都市論についての発表であった。そして村上氏によるメキシコ中央高原の事例、渡部による古代アンデスに関する発表が続いた。

ディスカッションでは、都市における神殿の役割、都市における連続性／不連続性などについて議論した。今後、議論を練り、刊行物につなげていく予定である。

シンポジウムには計 36 名の参加者があった。

附記：

テュレーン大学の村上達也さんがサバティカルで日本に滞在中に何かイベントをしましょうということで立案された企画であった。シンポジウム同日「新型コロナウイルス感染症対策の基本方針の具体化に向けた専門家の見解」が出され、日本全国でイベントが自粛の方向へ向かうことになった。結果的に人類学研究所が実施する 2019 年度最後のシンポジウムとなった。

(渡部森哉)



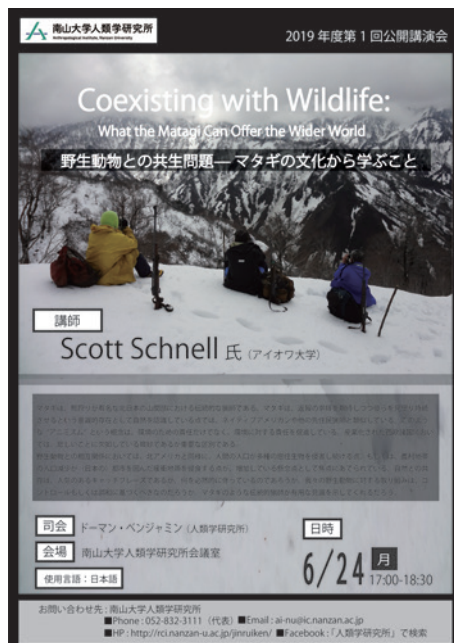
総合討論

# 公開講演会

## 第1回公開講演会

### Coexisting with Wildlife: What the Matagi Can Offer the Wider World 野生動物との共存問題 —マタギの文化から学ぶこと—

日時	2019年6月24日(月)、17:00～18:30
会場	南山大学人類学研究所1階会議室
講師	Scott Schnell 氏(アイオワ大学)
司会	ドーマン・ベンジャミン(南山大学人類学研究所・第一種研究所員)
使用言語	日本語



第1回人類学研究所主催公開講演として、アイオワ大学のスコット・シュネル (Scott Schnell) 教授をお招きし、「野生動物との共存問題—マタギの文化から学ぶこと」をテーマにした講演会を実施しました。

シュネル氏は、環境科学を研究テーマとする人類学者であり、現在の日本におけるマタギ、およびマタギと狩猟の違いに関して、非常に興味深い内容の講演を展開してくれました。

マタギ文化には潜在的に、「山の神」に捧げる宗教的な意味合いがあるといった儀式的な要素に関しても論じました。世界は、マタギから学ぶべきことが数多くあることなど、マタギにおける環境的な見解を概説しました。Fikret Berkes 著の書籍『Sacred Ecology』を引用しながら、TEK (伝統・環境的な知識) とマタギに関する知識、実行、信仰についてや、また狩猟とマタギのメディアにおけるアニメ (パンビ etc.) などについても短く紹介されました。堪能な日本語でのご発表で、参加者との質疑応答も活発におこなわれました。(ドーマン・ベンジャミン)



Scott Schnell 氏

## 第2回公開講演会

### El Paleoindio y las primeras cerámicas americanas (パレオインディアンと アメリカ最古の土器)

日時	2019年12月5日(木)、17:00～18:30
会場	南山大学人類学研究所1階会議室
講師	Roberto Lunagómez Reyes 氏(ペラクルス大学人類学博物館人類学専攻・教授)
司会	渡部 森哉(南山大学人類学研究所・所長/人文学部・教授)
使用言語	スペイン語(日本語通訳あり)

南山大学人類学研究所2019年度第2回公開講演会

**El Paleoindio y las primeras cerámicas americanas**  
(パレオインディアンとアメリカ最古の土器)

講演者：  
ベラクルス大学人類学博物館人類学専攻教授  
ロベルト・ルナゴメス・レイイエス (Roberto Lunagómez Reyes) 氏

1995年 ベラクルス大学人類学専攻  
2002年 メキシコ国立人類学歴史研究所 (INAH) 修士課程修了  
2014年 メキシコ国立自治大学 (UNAM) で博士号取得

**2019年12月5日 (木)**  
**17:00 ~ 18:30**

南山大学 人類学研究所1階会議室  
言語：スペイン語 (日本語通訳あり)  
事前申し込みは必要ありません。だれでも参加できます。  
問い合わせ先：渡部森哉 shinya@nanzan-u.ac.jp

  南山大学人類学研究所  
Anthropological Institute, Nanzan University 

ベラクルス大学人類学博物館のロベルト・ルナゴメス・レイイエス先生に、メキシコにおける最古の人類の証拠、および最古の土器が出現する背景について講演していただいた。講演はスペイン語で行われ、伊藤伸幸氏(名古屋大学)が日本語に通訳をした。参加者は計7名であった。

メキシコにおける最古の人類の証拠は、ホモ・サピエンスのものに限定され、それ以外のものはない。また北米大陸の最古の文化はクローヴィス文化とされているが、それよりも古い可能性のある遺跡もあるという。

従来土器製作は農耕、定住生活と結びつけられて考えられてきたが、メソアメリカ最古の土器は農耕民というよりも漁撈、狩猟、採集を主に行っていた人々が製作を始めたという。メソアメリカ最古の土器は1つではなく複数の系統に分かれ、南のコロンビア、エクアドルからどのように導入されたか、今後検討が必要である。また土器製作はトウモロコシ栽培と密接な関係があるとされてきたが、後の時代に主流となる、マノ(乳棒)とメタテ(石臼)を用いて粉にしてトルティーヤを焼くという調理法は確立していなかった。最古の土器群は無頸壺が多いことから、煮て食べる調理法が主流ではなかったと考えられる。

最新の研究成果をレビューする貴重な内容で

あった。講演会の最後には質疑応答が行われた。

(渡部森哉)



ロベルト・ルナゴメス・レイイエス先生を囲んで

### 第3回公開講演会

## 中国におけるヨメ不足の連鎖と雲南省ラフ族女性の遠隔地婚出

日時	2020年1月24日(金)、13:30~15:00
会場	南山大学 H棟・H25教室
主催	南山大学人類学研究所
講師	堀江未央(名古屋大学高等研究院・特任助教)
司会	宮脇千絵(南山大学人類学研究所・第一種研究員)

南山大学人類学研究所



南山大学人類学研究所2019年度第3回公開講演会

**中国におけるヨメ不足の連鎖と雲南省ラフ族女性の遠隔地婚出**

講師：堀江未央(名古屋大学高等研究院)

2020年1月14日(火)

時間：13:30~15:00  
会場：南山大学 H棟H25教室

現代アジアを生きる女性は、いかに自らのライフコースを選択しているのでしょうか。本講演会では、中国雲南省に暮らす少数民族ラフ族を対象に文化人類学的な調査をおこなっている堀江未央氏に、近年増加しているラフ族女性の遠隔地婚出から、ラフ族のジェンダー観と女性たちの生き方について講演していただきます。

なお本講演会は「人類文化学専攻講義(アジアの社会人類学12)講義(担当：宮脇千絵)」の一環として企画されたものであり、聴講は本学学生および教員に限ります。また聴講には、課題論文を読んでおくことを条件とします。

▶課題論文についての問い合わせ：宮脇千絵 (miyawaki@nanzan-u.ac.jp)

南山大学人類学研究所  
 ■Phone: 052-832-3111 (代表) ■HP: http://www.ic.nanzan-u.ac.jp/JINRUKEN/  
 ■E-mail: ai-nu@ic.nanzan.ac.jp ■Facebook: 「人類学研究所」で検索!



本講義では、現代アジアにおける女性像・男性像、ジェンダー、働き方・仕事観について関連する論文を講読しながら、そこから照射される私たちの生き方について文化人類学的視点から考察することを目的とし、関連する論文の購読をおこなってきた。これを踏まえ、中国の少数民族ラフ族女性を対象に、フィールドワークをおこなってきた堀江氏を迎え、ヨメ不足が深刻化する現代中国において、ラフ族女性が遠方の漢族男性に嫁ぐ事例が増加していること、それによって婚姻をめぐる規則が再編されていることをお話いただいた。

受講生にとっては、論文を読む以上の、生き生きとしたフィールドの話聞くことができるまとまりある機会となったと思う。なお、受講生以外にも2名の参加者があった。

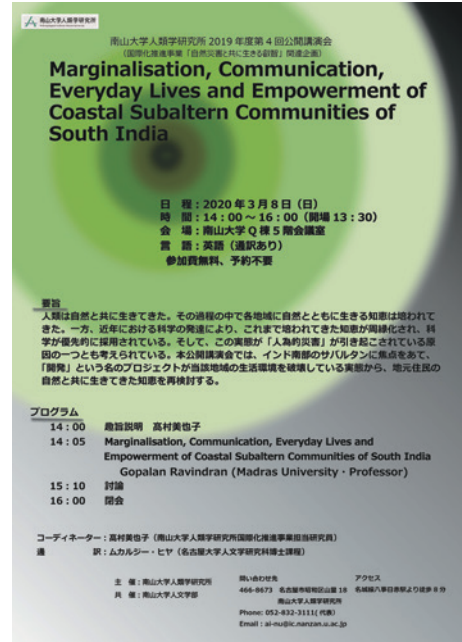
(宮脇千絵)



講師を囲んでの講演会

第4回公開講演会  
**Marginalisation,  
 Communication, Everyday  
 Lives and Empowerment  
 of Coastal Subaltern  
 Communities of South India**  
 (国際化推進事業「自然災害と共に生きる叡智」  
 関連企画)

日時	2020年3月8日(日)、 14:00~16:00 (開場 13:30)
会場	南山大学Q棟・5階会議室
講師	Gopalan Ravindran (University of Madras・教授)
主催	南山大学人類学研究所
共催	南山大学人文学部
司会	高村美也子(南山大学人類学研究所・研究員)



インド南部のサバルタンに焦点をあて、「開発」という名のプロジェクトが当該地域の生活環境を破壊している実態から、地元住民の自然と共に生きてきた知恵についてお話をいただいた。

Marginalisation, Communication, Everyday Lives, Empowerment, Subaltern の概念に関して言及し、既に概念化されている内容をそのまま受け入れるのではなく、時代、空間の変化等、環境も含め、その語彙の概念化をするべきである。よって、現在の事象を分析する際、現在のみを考慮するのではなく、時代を遡った上で、分析することが必要である旨論じられた。ディスカッションでは、インド・タミル州チェンナイに位置するマリナビーチの漁村を中心に、漁民のエンパワーメント、女性の経済活動エンパワーメントについて議論し、参加者と意見交換が行われました。

なお、本公開講演会は、Covid19の影響により非公開で実施されました。

(高村美也子)



Gopalan Ravindran 氏

# 人類学フェスティバル

## 人類学フェスティバル 2019

日時 2019年10月27日(日)、10:00～17:00

会場 南山大学キリスト教センター(旧ロゴスセンター)1階

主催 南山大学人類学研究所

共催 南山大学人文学部人類文化学科

### ● EC フィルム上映「東南アジア山地民の暮らしを彩る手仕事」 (企画:人類学研究所)

〈会場〉13 講話室

〈上映スケジュール〉

① 10:20～10:52、⑤ 13:40～14:12

#### ▶ モンの大麻布づくり (32分)

「織物用の麻糸づくり」

タイ・ターク県、1965年、7'00"

「麻織の縦糸の仕掛け」

タイ・ターク県、1965年、17'00"

「足踏織機での麻織り」

タイ・ターク県、1964年、8'00"

② 11:00～11:31、⑥ 14:20～14:51

#### ▶ モンの銀細工とロウケツ染め (31分)

「銀線細工と首飾りづくり」

タイ・ターク県、1964年、13'30"

「子供の背負い布のロウ染め」

タイ・ターク県、1965年、17'00"

③ 11:45～12:04、⑦ 15:15～15:34

#### ▶ アカの家屋建築 (19分)

「家の建築」

タイ・チェンライ県、1965年、14'00"

「家の新築時の犬の供犠」

タイ・チェンライ県、1965年、4'30"

④ 12:15～12:48、⑧ 15:50～16:23

#### ▶ アカとモンの暮らしの道具 (33分)

「蓋つきの籠編み」

タイ・チェンライ県、1965年、16'30"

「木綿の種子での飾り紐編み」

タイ・チェンライ県、1965年、11'00"

「トウモロコシの脱穀と製粉」

タイ・ターク県、1965年、5'00"

### ● 星空人類学 2019

(企画:人文学部人類文化学科・後藤明ゼミ)

〈会場〉中央ホール(プラネタリウム)

12 講話室(ワークショップ、展示)

〈プラネタリウムのスケジュール〉

① 11時、② 12時、③ 13時、④ 14時

⑤ 15時、⑥ 16時

### ● 中国皇帝たちの世界観

—古代都市と陵墓— (企画:人文学部人類文化学科・西江清高ゼミ)

〈会場〉食堂

〈内容〉2019年度の学生によるフィールドワーク実習の成果を、写真パネル、パワポで解説します。中国皇帝たちの世界観に触れてみてください。

### ● RePurposed 富洲原

—ギョギョつと編みだそう—

(企画:南山チャレンジプロジェクト)

〈会場〉図書室

〈内容〉

・ミサンガのワークショップ(参加無料、随時受付)

・オリジナルミサンガの作成。スタッフが皆さんのリクエストに応じてオーダーメイドで作成し、後日郵送いたします(要郵送料370円)

・コースター、バッグ等のアップサイクル製品の販売

\*南山チャレンジプロジェクトとは、学生が主体的に、学内の活性化や大学での学びを活かした取組、地域との交流、国際交流などを推進する課外活動を大学として支援し、学生の成長につながる多様な機会を作り出すことを目的とした事業です。本活動は2019年度の採択プロジェクトのひとつです。

詳しくは、特集ページをご覧ください。

# 共催

## 社会倫理研究所 2019 年度第 1 回懇話会 (シリーズ懇話会 「3.11 以後何が問われているのか」 誰にとつての「復興」か? 一住する・寓するの社会倫理一



- 日時 2019年6月29日(土)  
14:00~17:30 (13:30 開場)
- 会場 南山大学 Q 棟 5 階会議室
- 主催 社会倫理研究所
- 共催 人類学研究所
- プログラム
  - ・演題1  
秦範子 (都留文科大学・非常勤講師)  
「被災地の復興計画と持続可能な地域づくり」
  - ・演題2  
松尾隆佑 (法政大学・兼任講師)  
「複数のまちに住むこと、  
あるいは遠くからの自治」
  - ・司会・コーディネータ  
三好千春 (社会倫理研究所・第二種研究所員/  
人文学部・教授)
  - 森山花鈴 (社会倫理研究所・第一種研究所員/  
法学部・准教授)
  - ・コメンテータ  
藤川美代子 (人類学研究所・第二種研究所員/  
人文学部・准教授)

東日本大震災、東京電力福島第一原子力発電所の事故の発生以降、被災地の復興と防災(減災)を実現すべくさまざまな対策が練られてきた。だが、復興・防災とはそもそも、「誰」にとつての、「どのような」状態を指すのか、民主主義を標榜する日本という社会にあって、復興・防災の理想像には「誰」の声が反映されるべきなのかといった問題に、私たちは果たしてうまく向き合ってきただろうか。

環境教育学・社会教育学を専門とする秦範子氏は、長期にわたる自身のフィールドワークに基づき、持続可能な復興・防災がより生活に密着した形の小規模な地域コミュニティ(ここでは、かつての集落レベルを想定)で模索され、施策に活かされることになった事例を紹介した。たとえば、気仙沼市大谷地区では、海岸線に計画された巨大な防潮堤建設を黙って受け入れるのではなく、里海としての海や岸との望ましい向き合い方を話し合うというプロセスを経て、防潮堤を計画案よりも陸地側に後退させ国道との兼用道とする要望を出し、国交省・林野庁・県の承認を受けるに至っている。しかし、全体として見れば、そうして声を上げる住民と復旧事業の管理者たる国・県との調整役を担うべきは誰なのかといった実際的な課題も多く残されているのが現状だという。

松尾隆佑氏は政治学の立場から原発事故の避難者の事例を扱い、遠隔地での避難をつづけながら避難元(被災前の生活の場)の復興の主体として各種の意思決定プロセスに与すると人間の尊厳と権利に大きく関わる問題が、現在の日本では制度として保障され得ないという現状について論じた。民主主義を集合的自已決定と理解するならば、自らにとって重大な決定をもたらし得る政治的共同体(国家・自治体)が複数ある場合、どの決定過程にも参画する権利をもつべきと見なし、個人に多重的シティズンシップを認めることもできよう。しかし、国は参政権と納税の二重化を防ぐことを理由に、住民が声を上げるための装置を現住所に基づく住民登録

のみに一本化するという姿勢を崩してはいない。

コメンテータの藤川美代子は、中国南部の船上生活者が経験した陸上定住化に触れながら、日本で進められる防災・減災政策との間に共通した論理が見られると指摘した。それは、科学知によるリスクの予見・管理・制御を人間の行動の基盤とすべしとの「リスク社会化」(ウルリッヒ・ベック 1998)、そして国家は最大公約数の幸福を実現するために国民の庇護に努めねばならぬ(これは、庇護を求める国民は国家に従わねばならぬと同義)とする国家像が前提されている点である。さらにそこに為政者の「別様の空間での別様の生き方に対する想像力の欠如」が加わることで、望ましい復興・防災・減災をめぐる現場と事業管理者たる国との間に根本的なズレが生じる可能性があるという。

これらの報告・コメントを受けて、最後はフロアと報告者との間で活発な議論が交わされた。

(藤川美代子)



会場の様子

## 新学術領域研究 「出ユーラシアの統合的人類史学： 文明創出メカニズムの解明」 キックオフ・ミーティング

日時 2019年9月8日(日)、13:00～17:00

会場 岡山大学津島キャンパス 文法経講義棟 10 番教室

主催 新学術領域研究「出ユーラシアの統合的人類史学：文明創出メカニズムの解明」

共催 南山大学人類学研究所、岡山大学社会文化科学研究科文明動態学研究センター、京都大学、理化学研究所

### プログラム

- ・「出ユーラシアの統合的人類史学：文明創出メカニズムの解明」 概要と目標
- ・A01 班 人工的環境の構築と時空間認知の発達
- ・A02 班 心・身体・社会をつなぐアート/技術
- ・A03 班 集団の複合化と戦争
- ・B01 班 民族誌調査に基づくニッチ構築メカニズムの解明
- ・B02 班 認知科学・脳神経科学による認知的ニッチ構築メカニズムの解明
- ・B03 班 集団の拡散と文明形成に伴う遺伝的多様性と身体的変化の解明
- ・C01 班 三次元データベースと数理解析・モデル構築による分野統合的研究の促進
- ・全体議論・質疑

本キックオフ・ミーティングは本年度に採択された新学術研究領域「出ユーラシアの統合的人類史学 — 文明創出メカニズムの解明 —」の概要を説明するために開催され、人類学研究所からは中尾准教授が参加し、司会、発表と討議を行った。

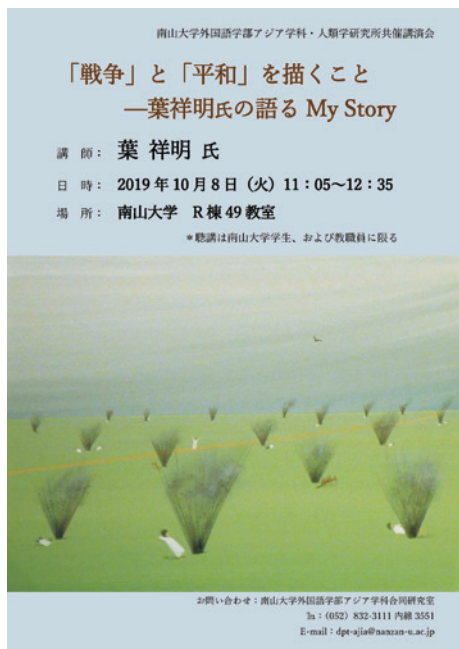
ミーティングは各班の研究概要を説明するものであったが、日本や北米・中南米からオセアニアまでにおいて、各班が具体的にどのように連携し、どうやって各地の文明創出メカニズムを解明していくか、その方策が紹介された。中尾准教授は「三次元データベースと数理解析・モデル構築による分野統合的研究の促進」というタイトルで発表し、他班の研究内容を統合するためのデータベース構築と数理解析の手法を紹介・議論した。当日の参加者は約60名であった。

(中尾央)



会場の様子

## 「戦争」と「平和」を描くこと —葉祥明氏が語る My Story—



方法がない。高次元の人間になるための一助になるのが、画家と絵本作家である自分の役目である。生業としてだけでなく、一人の人間として絵本作家がすべきことを模索し続けてきた葉祥明氏のこのような思いも講演に込められていた。

(張玉玲)



葉祥明氏の講演に学生も聞き入りました

- 日時 2019年10月8日(火)、11:05~12:35
- 会場 南山大学 R49 教室
- 主催 南山大学外国語学部アジア学科
- 共催 人類学研究所
- 講師 葉祥明氏(北鎌倉葉祥明美術館・葉祥明阿蘇高原絵本美術館・葉祥明資料室・総代表)
- 司会 張玉玲(人類学研究所・第二種研究員/アジア学科・教授)

外国語学部アジア学科と人類学研究所の共催によって、「『戦争』と『平和』を描くこと—葉祥明氏の語る My Story」と題した講演会を行った。講師は、著名な絵本作家・詩人葉祥明氏が務めた。南山大学の学生および教職員合わせて95名が参加した。

講演は、葉祥明氏の生い立ちや、絵本、詩集および絵画制作のきっかけなど葉祥明氏の個人の物語から始まり、地雷除去や原爆、女性差別、児童虐待など様々な社会問題を絵本作品に取り上げるようになった契機など、葉祥明作品、特に戦争と平和に関する作品を理解するための手がかりが多く含まれた興味深いお話であった。

人類の欲望や暴力によってもたらされた戦争や自然破壊、そして人々の不幸などを徹底的になくすには、最終的に人類が「高次元の人間」になる以外、

# 共同研究会

## 人類学研究所共同研究 「人類学・考古学の 「大きな理論」と「現場の理論」 (2019～2021年度) 代表：宮脇千絵 (人類学研究所 第一種研究所員)

人類学者・考古学者はフィールドでの出来事を、民族誌としてまとめあげる過程で、理論的な考察をおこなうことで、学問への貢献を果たす。一方で、1990年代以降、いわゆるマリノフスキーを典型とするスタイルにとどまらない、多様なフィールドワークや記述方法の模索、理論構築の試みがおこなわれている。それゆえ、その学問的営みがもはやホリスティックな理論に集約させることだけが目的ではない、もしくは各論の積み上げが主流となることによって誰しもが拠るメジャーな理論自体が不在となっているかのような状態にある。また、現地の研究者やインフォーマントとの協働がますます要請される現在において、その成果のとりまとめには、むしろ現地において構築された理論への理解が不可欠であろう。

それでは、いわゆる「大きな理論」と、各地において構築されてきた「現場の理論」はどのような関係にあるのだろうか。本研究会では、人類学・考古学における「大きな理論」をメンバー全員で整理し、同時に各メンバーがフィールドにおける「現場の理論」を報告することを通じて、人類学・考古学における両者の関係性を検討する。この取り組みは、転換期を迎えている人類学・考古学的思考の再検討を図ることを可能にするとともに、フィールドに立つ我々研究者ひとりひとりが眺める理論の定点観測の共有にもつながると考える。

### 第1回研究会

- 日時 2019年6月23日(日) 15:00～18:00
- 趣旨説明 宮脇千絵(南山大学)  
「趣旨説明と研究会の進行について」
- 発表① 山田仁史(東北大学)  
「ヴィルヘルム・シュミットの生涯と今日的評価」
- 発表② 角南聡一郎(元興寺文化財研究所)  
「大林太良の物質文化研究—隣接諸学問の関係再考に向けて—」
- 発表③ 後藤明(南山大学)  
「大林太良の考古学・日本古代史研究」

### 第2回研究会

- 日時 2019年11月9日(土) 15:00～17:30
- 発表① 渡部森哉(南山大学)  
「アンデス研究における理論の系譜」
- 発表② クネヒト・ペトロ(南山大学)  
「Missionary and Anthropologist: A Contradiction?」

### 第3回研究会

- 日時 2020年1月26日(日) 15:00～17:30
- 発表① 岡本圭史(中京大学)  
「異人・都市・国家——ケニアの悪魔崇拝言説について」
- 発表② 吉田竹也(南山大学)  
「観光の定義の困難さについて」



## 研究業績

### DORMAN, Benjamin

#### 寄稿

“Editor’s Note”, *Asian Ethnology* 78/1, p.1, 30  
July 2019.

### 宮脇千絵

#### 共著(分担執筆)

「伝統とファッションのはざまを装う——中国のモン衣装における変化と規範」、牧口千夏・石関亮・小形道正(編)『ドレス・コード?——着る人たちのゲーム』、pp.257-264、京都服飾文化研究財団、2019年8月。

「普段着と晴れ着」、信田敏宏(編)『東南アジア文化事典』、pp.344-345、丸善出版、2019年10月。

“New Style” of Ethnic Clothing: Dress between Tradition and Fashion among the Hmong in Yunnan, Ayami Nakatani(ed.) *Fashionable Traditions: Asian Handmade Textiles in Motion*, pp.41-57, Lexington Books, February, 2020.

#### 研究会・シンポジウム報告

「(モノ語り Part V) 中国雲南省モン衣装の変化」、国立民族学博物館共同研究「伝統染織品の生産と消費——文化遺産化・観光化によるローカルな意味の変容をめぐる」、国立民族学博物館、2020年2月16日。

「中国における「民族衣装」とは何か——雲南省文山のモン／ミャオ族の「新しいスタイル」を事

例に」、国際ファッション専門職大学基幹共同研究「コンタクト・ゾーンとしての現代ファッション」第5回現代ファッション特別セミナー、2020年2月19日。

#### 書評

「塚田誠之(編)『民族文化資源とポリティクス——中国南部地域の分析から』、風響社、2016年」『文化人類学』84(1)、pp.107-110、2019年6月。

#### 講演

「中国ミャオ族の晴れ着と普段着」、「国立民族学博物館 世界のかわいい衣装」ギャラリートーク、阪急うめだギャラリー、2019年11月16日。

# 科学研究費助成事業 (2019 年度採択課題)

氏名	2019年度採択課題		
石原美奈子	基盤研究 (B)	エチオピアにおけるイスラーム化の史的検証:アラビア文字資料の収集・分析を通して	継続
後藤明	基盤研究 (B)	ミクロネシアにおけるスカイスケープ考古学の実践	継続
渡部森哉	基盤研究 (B)	南米アンデスの初期帝国ワリの成立と地方支配に関する研究	新規
後藤明	基盤研究 (C)	人類学的知の表現空間としてのプラネタリウム:日本列島のスカイロアの多様性	継続
吉田竹也	基盤研究 (C)	バリと沖縄の楽園観光地に生きる観光サバルタンの事例考察を通じた観光リスク論の探求	新規
ANTONY Susairaj	基盤研究 (C)	新興中間層の台頭とインド映画の新局面—新ジャンルの成立と映画産業の変貌を焦点に—	新規
張玉玲	基盤研究 (C)	福建省福清出身華人の移住および同郷紐帯の拡大と文化的・社会的制度としての「故郷」	新規
吉田早悠里	若手研究 (A)	F.J. ビーバー資料群の救出:20世紀初頭エチオピア無文字社会の歴史解明にむけて	継続
中尾央	若手研究 (B)	考古学理論・実践の歴史・哲学的考察に基づく人文学の哲学の基盤構築	継続
藤川美代子	若手研究 (B)	船上生活者の教育と福祉に関する文化人類学的研究:日本・中国の都市部と村落部の比較	継続
宮脇千絵	若手研究	現代中国における少数民族女性の稼得労働とエスニシティに関する人類学的研究	新規
中尾央	新学術領域 研究 (研究 領域提案型)	三次元データベースと数理解析・モデル構築による分野統合的研究の促進	新規
吉田早悠里	国際共同研究 加速基金 (国際共同研究 強化 (A))	F.J. ビーバー資料群の共有・保存・利活用に向けたデジタル・アーカイブズ構築	新規



## 刊行物 【2019年度】

### 刊行物

- 人類学研究所（編） 『年報人類学研究』 第10号（2020年3月31日発行）
- 人類学研究所（編） 『Asian Ethnology』 Volume 78, Number 1（2019年6月30日発行）
- 人類学研究所（編） 『Asian Ethnology』 Volume 78, Number 2（2019年12月10日発行）
- 人類学研究所（編） 『人類学研究所通信』 第19号（2020年3月31日発行）
- 渡部森哉（編） 『人類学研究所 研究論集』 第9号（古代アメリカ諸文化における在地性）（2020年3月31日発行）

---

### ウェブエッセイ「人類学メモランダム」

- 2019.05.03 [エッセイ11: ひよんなことから No.5] 「Are you a Roman Catholic Priest or Fieldworking Anthropologist? : Some Hidden Memories about the Kakure Kirishitan Survivors in Nagasaki Settings」 MUNSIL, Roger Vanzila（人類学研究所第二種研究所員／国際教養学部国際教養学科・准教授）
- 2019.05.03 [エッセイ12: ひよんなことから No.6] 「引き継がれる権力関係?への気づき: ある生産者との会話から」 濱田 琢司（人類学研究所非常勤研究員／関西学院大学文学部・教授）

---

### AE Podcast

1. Title: Interview with Frank Proschan: Folklore, Folklife, and Intangible Cultural Heritage  
(<https://asianethnology.org/page/podcastproschan>)  
Interviewer: Frank J. Korom  
Published: Thursday Aug 22, 2019
2. Title: Interview with Guha Shankar: Folklife and Film  
(<https://asianethnology.org/page/podcastshankar>)  
Interviewer: Benjamin Dorman  
Published: Sunday Aug 25, 2019
3. Title: Interview with Robert Campbell, Director of NIJL  
(<https://vimeo.com/376579109>)  
Interviewer: Benjamin Dorman  
Published: Thursday Dec 5, 2019

4. Title: Interview with Tom Bauerle: Ghost Stories from Japan  
(<https://asianethnology.org/page/podcastbauerle>)  
Interviewer: Benjamin Dorman  
Published: Tuesday Jan 21, 2020
  5. Title: Interview with Roald Maliangkay: Korean Folk Music, Cultural Policy, and Preservation  
(<https://asianethnology.org/page/podcastmaliangkay>)  
Interviewer: Benjamin Dorman  
Published: Monday Feb. 17, 2020
  6. Title: Interview with McComas Taylor: Contemporary Critical Theory and Narrative Sanskrit Texts  
(<https://asianethnology.org/page/podcasttaylor>)  
Interviewer: Benjamin Dorman  
Published: Wednesday Mar. 4, 2020
  7. Title: Interview with Thomas David DuBois: Studying Food in China  
(<https://asianethnology.org/page/podcastdubois>)  
Interviewer: Benjamin Dorman  
Published: Tuesday Mar. 25, 2020
- 

#### 対談映像「Connect to クネヒト」

- 第1回目     2019年11月20日公開 (<https://vimeo.com/371542620>)  
第2回目     2020年2月19日公開 (<https://vimeo.com/391910463>)

## 人類学 研究所 スタッフ

所長	渡部森哉	人文学部人類文化学科・教授
第一種研究所員	DORMAN, Benjamin 官脇千絵	外国語学部英米学科・教授 准教授
第二種研究所員	ANTONY, Susairaj 石原美奈子 川浦佐知子 CROKER, Robert 後藤明 張玉玲 中尾央 藤川美代子 MUNSI, Roger Vanzila 吉田早悠里 吉田竹也 RIESSLAND, Andreas	人文学部人類文化学科・講師 人文学部人類文化学科・教授 人文学部心理人間学科・教授 総合政策学部総合政策学科・教授 人文学部人類文化学科・教授 外国語学部アジア学科・教授 人文学部人類文化学科・准教授 人文学部人類文化学科・准教授 国際教養学部国際教養学科・准教授 国際教養学部国際教養学科・准教授 人文学部人類文化学科・教授 外国語学部ドイツ学科・准教授
研究員	高村美也子	国際化推進事業・研究員

## 非常勤 研究員 【2019年度】

氏名	研究課題
濱田 琢司 (関西学院大学文学部・教授)	「近代化」と「伝統性」をめぐる工芸産地の実践に関する研究について
角南 聡一郎 (元興寺文化財研究所・総括研究員)	金関丈夫・国分直一による台湾での学術活動と戦後の人類学／考古学—物質文化からの眺望—
山田 仁史 (東北大学文学部・准教授)	ドイツ語圏民族学における「大きな理論」と「現場の理論」
藏本 龍介 (東京大学東洋文化研究所・准教授)	ミャンマーの仏教NGOに関する文化人類学的研究
中尾 世治 (総合地球環境学研究所・研究員)	西アフリカにおける「国家をもたない社会」のふたつの歴史:人類学史とフィールドの歴史との交錯としての歴史人類学
森田 剛光	在日ネパール人の社会適応の動態に関する研究
斉藤 典子	日・台・韓の「アマ」(海女と海士)の海洋資源利用と資源分配に関する民族誌的研究
Susanne Klien	Transnational mobile Japanese selves in Europe, moratorium migration and the quest for subjective well-being outside Japan
杉尾 浩規	人類学におけるアタッチメント研究の現状と展望
山崎 剛	人類学を通じた社会活動の実践的研究
木田 歩	人類学を通じた社会活動の実践的研究
小坂 恵敬	無縁・縁・有縁のパプアニューギニア社会に対する文化翻訳
菅沼 文乃	高齢者の“生きがい”の人類学的研究:沖縄都市部の高齢者を事例として
野澤 暁子	バリ・ヒンドゥー総本山ブサキ寺院における奉納音楽活動の民族誌的研究
梅津 綾子	日本で生きるマイノリティ親子・家族の生き方—性的少数者、ムスリムの観点から
佐藤 純子	仮面—その根源的意味の考察にむけて—
辻 輝之	Sharing Mother: Sociality, Spirituality, and Sexuality of the Walking Statue等
Frank J. Korom	The Making of a Transnational Sufi family
Patrick McCartney	日本のヨガスケープ(The Economisc of Imagination and Utopian Aspirations of Transglobal Yoga in Japan)
Paul Capobianco	Qualitative dimensions of Japan's demographic changes
須田 征志	タンザニアにおける伝統医療従事者の知識の共有とモノを介した社会性に関する人類学研究

人	類	学
研	究	所
通	信	第20号

2019

2020年11月30日刊行

南山大学人類学研究所

Anthropological Institute, Nanzan University

編集責任者: 宮脇千絵

編集委員: 渡部森哉、ドーマン・ベンジャミン、藤川美代子

編集補助: 加藤英明

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18

TEL: 052-832-3111(代表)

Website: <http://rci.nanzan-u.ac.jp/jinruiken/>



デザイン: 株式会社サウザンドデザイン